SAIHIKA2017 04

SAIHIKA201704

ごろつき「この辺で山ほど魔獣の首を刈っている奴がいるらしい。くっくっく、手柄を横取りさせてもらうぜぇ。相当腕が立つらしいが、こっちは九人がかりよ。さっくり殺ってやるぜ！」
ごろつき「すみません、出来心だったんです！　俺はその気じゃなかったけどアイツが言い出して……だから！　俺はあなたを殺すつもりなんて――」

男（長）「何、魔剣を賭けて勝負だって？　おいおいいいのかい？　これでも俺は魔剣使いとして他の町じゃあ名が知られてんだぜ。ザンテツと言ったな。あんたの魔剣、頂くぜ！」
男（太）「ア、アニキーッ！　十秒と経たずにアニキがやられるなんて……。この外套の男、一体何者なんだ！？　って、そんなことよりアニキを宿に運ばなくちゃならねえ」

コノハ「いいか寅！　今日という今日は私が主導権を握るからな。大体、夫婦とはいえ私はこの島の守り神なんだぞ、それをおぬしときたら――」
コノハ「もう無理じゃあ！　わるっ、悪かったから、偉そうな口聞かないから、ごめんなさぁああああああああ！　旦那様ッ、やだぁあああああああ！」

ルナリア「ねえねえ！　シシトラ君の血ちょーだいよぉ。一滴！　一滴でいいからさ。ほら、犬歯のさきっちょ、さきっちょだけだから！」
ルナリア「あへえぇ……シシトラ君の血液美味しすぎるのぉ！　ああ駄目、美味しすぎて人を保てないッ、蝙蝠になっちゃうのぉ！」

カイム「暗殺組織？　とかいうのをつぶして来いと聖女に言われた。何だかよく分らんが、俺なら楽勝って言ってたしすぐ終わるだろう」
カイム「ふう……五分か。思った通りあっけなかったな」

表紙：SAIHIKA201704　表紙　鴇和　1
目次：SAIHIKA201704　目次
（と何故か即落ち二コマ）　マウス　2
小説：
キュウセイの魔女とその騎士　マウス　3
A Wonderful Table.　矢野ヒカル　6
余生は潰えた物語の上で　T.K　１１

キュウセイの魔女とその騎士

～リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

港に降り立ったアデルが振り返る。巨大な船舶から降りる人々の数は途中で停泊したどの港よりも多かった。そして、これから船に乗り込む人数もまた多い。積み荷と人の移動だけで一日はかかりそうだ。

「良かったのか？　アデル」

「ええ。十分過ぎるほどの対価は得られたから」

「そうか、君がいいなら構わない」

船上の人影の中にアデル達の知った顔が見えた。ザンテツとシシカの二人組と、東国の姫君とその側近。アデルはお姫様の表情が少し曇っていたのが気になったが、過ぎたことを考えても仕方がないと前を向いた。

ロードセンタリオから東大陸最大の国イルミナ公国までの船旅。その中途で出会ったある青年に、アデルは一つの交渉を持ち掛けられていた。

『君の持つ杖を触らせてほしい』

それは一見すれば、物珍しい彼女の装備への好奇心から来るものに感じられたが、当の本人、ならぬ本杖であるメメが何かしらの危機感を抱いたのでアデルはしばらくの間断り続けることにした。

そして今日、目的地到着の日の朝。彼女は要求を呑むと突然意思を翻した。

アデルはその時青年の側にいた少女、どうやら一国の姫君らしい彼女が嫌な顔をしたのを強く思い出す。

アデルらが降りるのは伝えていたし、青年は要求が通らず焦っていたのは容易に想像がついた。故に彼に対するこちらからの要求はあっさりと通った。

『お姫様たちなら相応のお金、持っているわよね？』

そして、ただ杖を触らせるというだけでアデルは莫大な財を手に入れることとなった。交渉はマキナが前に立って行ったが、彼自身、ここまでの大金が二つ返事で支払われたことに驚きを隠せなかった。相手の姫はというと、交渉を不利に導いた青年の腹に蹴りを入れて鬱憤を晴らそうとしていた。

「メメ、何も問題はないのね？」

『ああ。何かを奪われたとかそういうのは、ない。ただ、内面を覗かれたような感覚があったぐらいだね』

青年は記憶を取り戻すためだと言った。そのために生ける武具を探さなければならないと。深く聞くことはしなかったが、重い事情があるのだろう。隣の姫君は彼の目的に対して否定的な態度であったが。

ローザ・ベアトリクスという女商人とその付き人がメメと同じようなモノと共にあったという情報も伝えると、青年が大きく感謝を告げた。当然、それも交渉の材料として対価を受け取っているのだが。

そして現在。港からイルミナへと足を踏み入れた三人だったが、アデルとノエルの二人はすぐに足を止めた。

「これは……」

「で、でっか……！」

「うん？　まあそうだろうな。なんせイルミナは東大陸に限らず、矢印大陸の中で最大の都市と呼ばれているからな。つってもロードセンタリオもなかなかだし、そこまで驚くことはないだろう」

「いやいや、それにしたって大きいし、何より――」

「色々な人々が歩いている。服装どころか、姿形も、大きさも。景色の色は、あの街の比じゃない」

「東大陸から北や南への玄関口だし、極東からも人が来るからな。あらゆる種族の垣根を越えてヒトやモノが集う。そういう場所だぜ、この国は」

犬や猫のような耳と尻尾を持つ獣人に、角の生えた巨人や二足歩行のトカゲ、ゴブリンやオークなどの小鬼。あげく、道の脇をのそのそと液体状の生き物が動いていた。

「誰かぁー！　荷物の実験用スライム落としちゃったんですけど見掛けませんでしたかぁ！？」

声が聞こえたのは頭上。背から生やした翼を動かしながら、女性が困ったように叫んでいた。

「おい姉ちゃん！　こっちだこっち。郵便屋なんだから配達物はもうちょっと丁寧に扱ってくれよ」

「すびばぜーん！　気を付けますぅ」

側で起きた珍事を横目にマキナが解説する。

「センタリオだと一部の貴重品輸送だけだが、この街はとにかく広いからな。有翼種の多くが郵便屋として駆り出されているんだ。価格競争の結果もあって市民でも気軽に利用できる値段だぞ。まああんまり安いところに頼むとあんなことも起きるんだが」

「なんつーか、もうさ。すげー、ぐらいしか言葉が出ない」

「ここで生まれ育ったから、この景色が普通だったな。何でもありな街だ。久しぶりに帰ってきたが、俺の知らない建物が山程ある。まるで違う景色で、だからこそなにも変わってないようで安心した」

活気ある大通りを歩いていく。道の左右には許可を得て商売をする無数の商人たちがいて、自慢の商品を並べて客を呼び込もうと声を上げる。
「そうだ、何か欲しいものあるか？」
「えっと、この辺の品物ってめっちゃ高くない？」
「まあ中央通りだからな。ああ見えてもこの辺の商人は皆一流の奴らだぜ。場所代がえげつないし。高い代わりに良いもの置いてる」
「でもそんな金ないし」
「あー……。まあ大丈夫だろ。なあ、アデル？」
「そうね」
「え？　え？　何でさ、教えてよ」
「そりゃあまあ、ねえ……？」
「お姫様のお陰でね」
「ちょっ、私は何にも知らないんだけど！」
「いやだって、船上にいるときいつも単独行動してたじゃねえか。二日目以降ずっとさ」
「そ、それは……。ちょっと考え事してたっていうか」
「まあ何だっていいじゃねえか。このマキナさんが奢ってやろう……じゃ、なかったな。シルメリアさんだ」
「そういやこの街ではそう呼べって言ってたけど何で？」
「何でも、だ」
「むっか。って、アデルも知ってそうな顔してるじゃん。また私だけ仲間外れ？」
「そう怒りなさんなお嬢さん。ほら、そこのベーコンサンドを買ってあげよう。肉が生地から完全にはみ出しているぞ」
「よっしゃ許す！」
「そのノリ向こうでも見たわね」
その後足が棒になるというノエルに餌を与えたり背負ったりしながら一行は歩き続け、ようやく宿に着いた時には港に降り立ってから六時間が経過していた。
無理もないだろう。それは空を飛ぶ有翼種ならよく分かっている。視界のずっと向こうまで続く人口の建築物。この街は広さにしてロードセンタリオの五倍はあった。

続く

屋上昼食会もメンバーが増えた。
まず、言わずと知れた兄さんと私。
次に幟さん。兄さんの友達。距離感が近い。身体を寄せたり、頭を撫でたり、私だけじゃなくて兄さんにも平気で。そのたびに兄さんが戸惑うのが可愛らしい。兄さんも年頃のオトコノコだからね。
兄さんがドキドキしてしまうのも仕方ない。幟さんは同性の私から見ても綺麗だ。高身長、長い脚、モデル体型。ボーイッシュなショートカットと、女性的魅力に溢れた脚線美。兄さんが好きそうだ。
あと、これは本人も知らないと思うけど、１年女子から人気がある。女性にモテるタイプの女性なんだなぁ。
幟さんは兄さんのことをどう思っているんだろう？　出会ってあまり経ってないのに、部屋に呼ぶのは……。それが幟さんの距離感なんだろうか？　それとも……。

その次に日良々さん。炊飯器ポストの依頼主。私よりも身長が低くて、可愛らしい。年上の女性に言うのは失礼かもしれないけど、守ってあげたくなる可愛らしさ。
引っ込み思案で、喋る時はゆっくり。でも私たちは急かしたりしない。日良々さんは日良々さんのペースで。
ヘアピンで留めた前髪は染衣さんのアイディアだとか。大きな目が愛らしい。あの目で上目遣いされたら、兄さんじゃなくても言うこと聞いてあげたくなる。
あと、日良々さんを語る上で欠かせないのが、その、胸の大きさ。身長は私のほうが大きいのに……。私たちの中で一番大きい。正直羨ましい。本人は「こんなもの……」なんて言ってたけど、それは持てる者の悩みです。
兄さんも日良々さんの前では優しい人を気取っているけど、結構胸に目線が行ってるのを私たちは知っている。見られてないと思ってるのは兄さんだけだよ。
……たまには妹も見てほしいよ。

そして最後に染衣さん。兄さんと私の友達。炊飯器ポストという活動は染衣さんが居たからこそ始まったみたいなところがある。その話はいずれか。
学園のアイドル（偶像）的存在として君臨している。本人にその気はないけど。周りからの羨望と、染衣さん自身の自己評価の間のズレ。そこに付け込んだのが兄さんだ。
今では兄さんは染衣さんのナンバーワンお友達だ。まあ、時折見せる表情からして、ただのお友達で止まるものではなかったり……。もちろん兄さんはそんな染衣さんの複雑な心境を知る余地もない。
染衣さんのトレードマークは、まずあの長い髪。天界から降りてきたから白い色をしているらしい。冗談。
そして黒縁メガネ。信者によると知性の象徴らしい。
身長は私と同じくらい。女性の平均。あと、母性の象徴らしい胸の豊満。
一歩引いた目で見られるのも頷けるくらい美人だけど、話してみると普通の女性。もしこの人が兄

さんの恋人になって、私のお義姉さんになったら、とても楽しいだろうな。
　兄さんは押したら押し通せるタイプの人間だ。行くんだ！　染衣さん頑張れ！
　……と、前々から思っていたけど、踏み出せない染衣さんに強力なライバルが登場。幟さんと日良々さん。二人とも染衣さんとは違った方向で魅力に溢れた女性。
　果たして染衣さんの運命は？
　そして屋上昼食会の雰囲気はどうなる？　修羅場展開に入ってしまうのか！？

A Wonderful Table.

　土曜日。ずっと雨が降っている。家には俺と京子。
　俺の部屋には俺……、と京子。
　微笑ましいものを見るように俺を見てくる。
　落ち着かない。
京太郎「なにしてんの？」
京　子「兄さんの行く末を見守っているんだよ」
京太郎「ええ……」
京　子「にやにや」
京太郎「あのさ、まあ、ここにいるのはいいとして、洗濯物は京子の部屋で干してくれないかな」
　京子の服、下着なんかも干されていて、目のやり場に困る。
京　子「眼福じゃないかな」
京太郎「……俺はお前がよくわからないよ……」
京　子「オンナノコは得てしてそういうものさ」
京太郎「女の子怖い」

　幟　「京太郎、おかわりー」
京太郎「おう」
日良々「幟ちゃん、いっぱい食べますね……」
　幟　「美味しいものはいっぱい食べないと損だからね」
京太郎「そう言ってくれると嬉しい。幟の食べっぷりは見ててほんと楽しい」
染　衣（わ、私もおかわりしようかしら……）
京　子「染衣さん、おかわりよそいましょうか？」
染　衣「い、いや……、遠慮しておくわ」
染　衣（色々気になるものがあるし……）
京　子「炭水化物はエネルギー、つまりはカロリーの塊ですからね」
染　衣（だ、だよね……）
　幟　「カロリーか、ボクはそんなに気にしたことないな」
　幟以外の女性陣が固まった。

染　衣（そ、そんな。私と同い年の女の子なのに）
京　子（幟さんって薄々感じてたけど、見た目に執着しない人？）
日良々（そ、それなのにそんなにスタイル良いんだ……）
　幟　「あはは、身長が高いのはそのせいかな」
染　衣（確かに幟さんは高身長でモデルみたい）
日良々（いいなぁ……）

　幟の発言にざわつくメンバーだったが、その後は普通の談笑に戻った。
　見えないところで、言葉にならない声で戦いが行われていたかもしれないが……、うん。男の俺がとやかく言うことではない。
　というよりも、メンバー増えたなぁ。
　数週間前まで俺と京子だけだったのが考えられないくらい。
　今は雨の季節だから空き教室を使っている。机を４つくっつけて、周りに椅子を置いて、座っている。座る場所は毎回バラバラ。
　今日は俺の隣に京子、目の前に幟、右の机に染衣さん、左に筧さん、という席順。
　なんだろう。女子に囲まれてるこの空間。思春期の男としてはちょっと嬉しいながらも気まずいものがあったり。

京　子「それじゃあ、あそこのショッピングモールに……」
　話題が変わって、俺があまり喋れなくなってきたので、ちょっと退散。
　　手洗いに行くという名目で廊下に出る。

京太郎「ふぅ……」
　女子が４人、男子１人。クラスの男友達が聞いたら羨ましがられるであろう状況。
　それに女子というのも、人気ナンバー１の染衣さんに、黙っていたら美人の幟、筧さんも可愛いし、京子もそれなりに。
　……男友達が聞いたら殴られそうなメンバーだな。
紫　子「こんなに可愛い女の子達を好き放題に出来るって、役得だぜ」
京太郎「違ぇよ！」
　何でこんな所に紫子がいるんだよ。
紫　子「こんにちは先輩。女の子空間に当てられちゃいましたか？」
京太郎「まあ、なんだ。そんな感じだ」
紫　子「そして発情しきった先輩はトイレで一人……」
京太郎「何もしてないからね」
紫　子「そうですか」
　そしてもう一人。俺の身近にいる女の子。鎖雨紫子。
紫　子「それにしても先輩のハーレム力はすごいですね。あんなに美人さんばっかり」

京太郎「俺を女たらしみたいに言うのは止めろ」
紫　子「違いますか？」
京太郎「違います」
紫　子「本当に？」
　ずいっと迫ってくる紫子。顔が近い。
京太郎「……そうだ。違う」
　俺は目を背けながら言った。紫子の近すぎる距離感は未だに慣れない。
紫　子「付き合ってもない後輩の女の子と何百回もキスしてるのに？」
京太郎「それお前が勝手にしてるだけだよね。俺は被害者」
紫　子「……」
紫　子「本当に？」
　紫子の、すべてを見通すかのような目。紫子はもしかしたら知っているのかも？　平静を装ってる俺が実は毎回ドキドキしていること。
紫　子「というわけで、今日のちゅーです」
　……彼女相手に隙を見せたらすぐにやられてしまう。

A Wonderful Table.

紫　子「ごちそうさまです。先輩」
　キスされて、いつも通りの唆る顔をしている京太郎を残して歩き去る。
紫　子（さて、そろそろ私も本気を出しますか）

A Wonderful Table.

？？？「いつも、ありがと」
京太郎「……」
？？？「えへへ、頼りにしてるよ京太郎くん」
京太郎「……」
？？？「これからも、よろしくね」
京太郎「……」
？？？「にこにこ」
京太郎「……教頭先生。こういう事を学園生に頼むの止めませんか？」
　俺は今日、教頭の仕事（書類整理）を手伝っていた。
教　頭「でも京ちゃんぐらいしかやってくれる人いないし」
　ちなみに教頭は何もしていないので、実質俺一人だ。
京太郎「それは自分でやれということなんじゃないんですか」
教　頭「先生に向かってその口の利き方はいけませんよ」

京太郎「今更先生ぶったって遅いですよ」
教　頭「でもさ、私のおかげで屋上使えることを忘れないでね」
京太郎「ギブアンドテイクの関係ですね」
教　頭「というわけで今日もボランティアありがと～またよろしく～」
京太郎「頼む気満々なんですね……」
教　頭「んっふっふ。そんなキミにこれをあげよう。プール招待券！」
京太郎「ありがとうございます。……今の時期にプールですか？」
教　頭「ま、シーズンはちょっと早いね。でも温水だから大丈夫。しかも人が少ないからゆったり出来るよ」
京太郎「それはいいですね」
教　頭「そこの経営者と知り合いで、この時期は人すくねぇから呼んできてくれって頼まれたんだよ」
京太郎「ぶっちゃけますね」
教　頭「冬は銭湯をメインにしてるからそこそこ入るんだけど、冬と夏の間のこの微妙な季節はあまり来ないんだと」
京太郎「ぶっちゃけますね……」
教　頭「つーわけで京ちゃんよろしく～」
　そう言って教頭先生は去っていった。結局これもボランティアじゃないか……。まあ嬉しいけど。
　俺の手にはプール招待券が６枚。
　誰を誘おうか。屋上昼食会のメンバーが５人、あと１人は……。
　いや……、ないか。
　うん。
　流石にアイツを誘うのは……。

次の日。屋上にて。
紫　子「先輩、あーん」
京太郎「……」
紫　子「あら、もしかして緊張していますか？」
京　子「……」
紫　子「皆さんの前ですものね」
日良々「……」
紫　子「それとも、いつも通り口移しの方がいいですか？」
　幟　「……」
京太郎「あの、紫子。どうして……」
紫　子「つれないことを言うんですね。……でも、そんなところも好きですよ」
　俺の腕に抱きついてくる。
染　衣「京太郎くん、最低……」
　どうしてこうなった……。

余生は潰えた物語の上で

T.K

斯くして、神々と魔法使いの頂上決戦が始まった。

大地の神が両手を前に出すと、ヴィエルラ樹海から大量の大きな岩石が空へ浮き上がってくる。それを天空の神が、レレミアと獣たちを囲うように空中へ固定した。

「あの子は相変わらずよくわかりませんから放っておくとして、厄介な畜生共を早く片付けた者から行くことにしましょう」

破壊の神の言葉を皮切りに、神々は散開した。レレミアは獣たちと視界を共有して四神を同時に相手取りつつ、思案する。

破壊の神の一撃は直撃しようものならば消し炭になることは目に見えているし、この岩石群も天空と大地が調和して形成されている。何より、ヒビナの力を吸い取った創造の神の力は計り知れない。

だが、レレミアは刺し違えてでも創造の神だけは殺すと決意していた。召喚された神なのだから殺しても器が消滅して座に還るだけだが、それでも到底、許すことは出来ないと。例の光景を見てしまうまで、あわよくばヒビナを殺せるのではないかと彼女は考えていたが、そんなことはもう頭から抜け落ちていた。

「……θ」

一振りの、巨大な黒い鎌がレレミアの手に握られた。その眼は紅く輝き、髪とローブは所々が燃えて火の粉が舞っている。臨戦態勢を取ったのは、味方の言葉すら無視して、こちらに突っ込んでくる馬鹿がいるからだ。

「絶対に殺す……」

掠れた声を出すレレミアの眼前に、三叉の槍を手にする蒼海の神が現れる。高速で突かれた槍の穂先が、レレミアの眼に届くか否か、といった寸前のところで小さな魔法陣に阻まれ、ピタリと止まる。

レレミアは蒼海の神を鎌で斬り上げた。対し、蒼海の神はあっさりと槍を手放し、十分な距離をとって浮いた岩へ着地する。鎌に真っ二つにされた槍は塵となった。

蒼海の神は再度作り出した槍を頭上に高く構える。その槍に、どこからか流れてきた水が巻きついて行く。

「はぁぁぁぁー……」

息を吐く。蒼海の神が足場にしている岩に亀裂が入る。

「ていっやっ！」

言葉遣いとは裏腹な可愛い声で放たれた槍は更に水を巻き込み、鋭い激流となって進む。

「ωθ」

レレミアが短く言葉を発すると、周囲の岩から木々や蔦が鬱蒼と茂る。上下左右なく、岩から矢鱈滅多と生えたそれらは、へし折れながらも水の勢いを殺していく。やがて、相殺した。

「なっ……！　炎ばかり使ってるから破壊系統が得意なのかと思ったら創造系統はそれ以上じゃない！　卑怯だぞゴラァ！」

「あたしは医者なんだから当然よ」

「……そう」

蒼海の神は俯き加減でニヤリと笑うと、
「じゃあもう手加減はいらねえなあ？」
海が二人を飲み込んだ。
岩石は変わらず、ぷかぷかと漂っていたが、それすら含めて、付近の空域がそこに透明な箱でもあるかのように水で満たされた。
蒼海の神は再度槍を構えて、投擲する。先程より動作が短く、槍の速度も早い。そして何より、海中が故に、槍が見えていてもそれが纏っている水の規模がわかりづらい。
レレミアは咄嗟に、燃え盛る獣を数匹召喚し、水を食らわせながら槍へ突進させる。彼女が水圧を感じた瞬間、獣たちがぐにゃりと捻れ、爆発を引き起こした。
外見上、空気中での爆発と変わりはしなかったが、当人への影響は段違いであった。水の化身そのものの蒼海の神は、どれほどの水流であろうと問題ないが、レレミアは違う。槍と相殺するほどの衝撃に、姿勢を維持できず吹き飛ばされる。
岩にぶつかり、やっと体勢を立て直したレレミアは、未だ自身が海の中であることに気付いた。
「出られはしないわ。死なない限りね」
蒼海の神の声が反響する。姿は見えない。
「というわけで、お望み通り出させてあげる」
不意に、ガツン、とレレミアの障壁に槍が突きたてられ、腹部に魔法陣が浮かび上がる。貫かれこそしなかったものの、押し出され、後ずさった。いつしか現れていた蒼海の神は、クスリと笑って霞のように消える。
そうしていると、次は後方から攻撃される。その次は右、次は左……いつしか、全方位からの絶え間ない刺突に、レレミアが障壁として展開している魔法陣は薄れていく。
蒼海の神は、水そのものとなって移動し、姿を現して攻撃しているのだとレレミアは仮定した。そこで、出来るだけ色の濃い実をつける木々を周囲の岩から大量に成長させ、葉も含めてその全てを弾けさせた。
水にじんわりと不純物が広がる。それらは蒼海の神の姿を浮かび上がらせた。視認することができた突きを鎌で止め、距離を取る。
「……それは、想定外ね」
濁った水の中で薄っすらと見える蒼海の神。彼女らは十人いた。
「ありがとう。そして、サヨウナラ」
全員が一斉に攻撃を仕掛ける。レレミアは何の抵抗もなく四方八方から串刺しにされた。血が水を赤く染めていく。
口元に笑みを浮かべるレレミアの掌には、獣たちの内部にあった紅く煌めく『核』の、何倍もの大きさの物が握られていた。蒼海の神がその光に気づくも、
「……――っ！」
「ええ。サヨウナラ」
時は既に遅かった。
単なる爆発ではなく一筋に収束した熱線が、レレミアの正面にいた蒼海の神を貫き、同時に海も何もかもを吹き飛ばした。
「あなたの敗因は二つある」
レレミアを突き刺していた蒼海の神の分身体は消え、海は雨となって降り注ぐ。空を漂う、腹に大きな穴が空いた蒼海の神を見て、レレミアは言う。

「一つは、変なプライドで本体をあたしの正面に持ってきたこと。刺されてれば、さすがにどれが本体か神気の量でわかるわね。真後ろだったら負けてたわ。もう一つは、これくらいじゃあたしは死なないってこと。医者って言ったでしょ？　斬撃より刺突の方が止血しやすくて助かるわ」

レレミアの傷がみるみるうちに塞がっていく。やがて、ローブも含めて綺麗に元通りとなった。

「……アンタみたいな医者がいてたまるもんか……」

恨めしそうに一つ言い残し、蒼海の神は光の粒となって消えた。

「さて、あと四神ね……」

はぁ、とレレミアは溜め息をついた。戦っている間、獣たちを操る余裕はなかったために、全滅させられている。戦力の分断、撃破には成功したものの、また新たな手を考えなくてはならない。

「三神ですわ」

「……？」

「ほら」

集合したらしい他の神々は、確かに一神足りなかった。天空の神がいない。

「あなたのさっきの、天空の神にも直撃していましてよ」

「まあ。他人事みたいに言ってるけど、貴女が蹴ったせいで直撃したのよう～」

「それは彼が風で服を捲ろうとしたからです。つまり自業自得です」

「ではそういうことにしておきましょうか～。……そろそろ岩が重いので、始めちゃってもいいですかー？」

「ええ。どのみち、ソルは連携など取れないでしょう」

破壊の神が、ソルを横目で見やる。遥か上空、太陽と重なっているためにその表情は定かではないが、完全に静止している。寝ているのか、あるいは。それは誰にもわからない。

「では～」

終始、笑みを浮かべていた大地の神がその眼を細く見開く。宙に浮いていた岩がレレミアに引き寄せられるように集まる。鈍い音を立てながら次々に岩がぶつかり合い、そして、小さな星が形成された。

その中から、ヒビナが氷塊に閉じ込めた時と同様に、炎でできた獣が岩を食って顔を出す。

「あら～」

大地の神が頬に手を当てて喜んでいると、巨大な鉄針が獣もろとも星を貫いた。もちろん爆発は起こったが、星と針は多少欠けただけであった。

その後も、どこからともなく現れた鉄針が星を串刺しにし、猟奇的な光景ができあがった。

「下にはこれを落とすところもありませんし、最後、お願いしますね～」

「……わかっています」

破壊の神は扇を広げ、横に斬り払う。空間が裂け、闇が覗いた。

パチン、と扇が閉じられた瞬間、放射状に黒い閃光が溢れ出す。それは小さな星を飲み込み、塵と化して行く。その中に、チカリと反射光のようなものが垣間見えた。

「――！」

何かに気づいたらしい大地の神が、咄嗟に破壊の神の斜め前に立つ。さらにその前方に、ヒビナが作った氷塊と同じ程の大きさの、分厚く、巨大な鉄の塊が出現する。

その鉄の壁を蝋のように溶かして、蒼海の神を貫いたものと似た熱線が、大地の神に直撃する。器が消滅する前に破壊の神が見たその横顔は、困ったように笑っていた。
「驚きました。あれだけ丁寧に視界と神気感知を潰しましたのに、わたくしの攻撃に合わせられるなんて」
淡く消えていく鉄の向こう側、額から血を流しているレレミアは鏡のように磨かれた紅い宝石の板を身体の前方に浮かせている。
「あたしも驚いたわ。あなたを狙ったつもりだったのに、この攻撃を曲げられるなんて」
レレミアが鎌を手に持つ。宝石にはヒビが入り、やがて砕け散った。
「質問の答えだけど、まあ、勘よね。あと、あなたたちの戦い方にも助けられたわ」
「……わたくしたちは神です。概念に、意識という名の毛が生えた程度のものであっても、です。故に、神通力以外に戦う術を知りません」
「なんだ。気付いてたんだ」
「あれだけ見ればお猿さんでもわかりますわ。あなたは不完全な『魔法使いたちの王』……魔神の力を使うための神気を、外部から補わなければならない。ですから、神通力を使わずに戦えば良いだけのこと。わたくしたちにはそれができなかった、というだけの話です。ですが……息が上がっているようですけれど、如何なさいましたか？」
「息なんてあがってるかしら？　あと二人くらいなら余裕だと思うけれど」
「強がりに意味はなくってよ。先の攻撃、わたくしは全ての力を使い切る勢いで撃ちました。それを完全に反転させるには、同程度の魔力が必要になる。……違いまして？」
「……あなたは、他の神と本当に毛色が違うわよね」
「ふふっ、おだてても何も出ませんことよ」
破壊の神は柔らかく微笑んだ。自身の象徴に相反して、大地の神より穏やかな笑顔だった。その表情は長くは続かず、澄ました顔に戻り、未だ沈黙を保ったままのソルに話しかける。
「さて、お膳立てはここまでです。聞いていましたね、ソル。あなただけはわたくしたちとは全くの『別物』です。残った神気を渡しますから、使い所は選ぶのですよ」
「……ありがと」
破壊の神の横にふらっと現れたソルの頬に、そっと手が添えられる。二神は髪の色と眼の色はまるで違うが、そうして並ぶと、背丈も顔も、とても似ていた。
「では、また会う日まで。……あなたを立てる代わりと言っては何ですが」
破壊の神が影となって消える。
家の横で、のんびり並んで座りながら戦いを眺めていたヒビナとシファの影から抜け出てきた破壊の神が、不意打ち気味にヒビナの頬へ口づけをした。
「今度こそ、御機嫌よう」
ヒビナにとびっきりの笑顔を残し、破壊の神は光と化して消えていった。
「わわわわ……」
なぜか慌てるシファと、呆れた表情をするヒビナ。
「また話をややこしくしていきやがって」
「レレミアさん……冷静さを取り戻してたのにまた……」

苦笑いを浮かべるシファの視線の先には、激しく斬り合うレレミアとソルの姿があった。ソルは体格に合っていない直剣を叩きつけ、レレミアは大鎌で器用にいなして反撃する。

空中において、凄まじい速度で剣戟が交わされる。昼間の空に、星の光のような火花が散る。

「あの……ヒビナさん」

「なんだ」

「失礼を承知で伺います。ヒビナさんも良いお歳ですし、レレミアさんとの関係を本気で考えたりはしないのですか……？」

「……」

「……すみません、私が言うことではなかったですね……忘れてください」

「いや。お前にはまだ何も話してないからな」

ヒビナは空へ目を向けた。そこで戦っている二人にではなく、ずっと遠くの空へ。シファはその横顔を黙って見つめている。

「十年前、確かに俺は、四百年もの間続いていた戦乱の世に終止符を打った。『魔法使いたちの王』を殺してな」

「……はい。それはもちろん知っています。約四百年前、突如として現れた恐ろしく強い魔法使いが、魔物と一部の魔法使いを率いて他の全国家へ戦争をしかけ、以後暗黒の時代が続きました」

「そうだ。だが、考えてもみろ。四百年間、頂点に君臨し続けた彼の王を倒した俺が、まともでいられると思うか？」

「……それは……」

「外見が十年変わらないのも、呪いみたいなもんだ。ただ、魔法の分野で言う呪いとはまるで違う。それよりもっと惨い。かつての王も、四百年間生きたんじゃない。四百年間死ねなかったんだ」

目を伏せてしまっていたシファが、はっと顔を上げる。

「玉座は巡る。いつまでも、な。世界を救う英雄はそれ相応の力を手にすることとなる。魔王を討ち滅ぼした英雄は過ぎた力に身を灼かれるんだ」

「そんな……」

「彼の王もそうだった。あいつがさらにその前の王を倒したのは六百年も前のことだ。文献は全てあいつが焼き払ったが、直接聞いたから間違いはない。あいつも、最初は俺とは変わらなかったんだ。こんな感じの生活を送っていたんだろう。だが二百年という時間は、人の心を折るのに十分だった」

「では、レレミアさんは……」

「レレミアが執拗に俺に噛み付いてくるのはそういうことだ。そしてあいつが考えているやり方は、おそらく正しい。この負の連鎖を断ち切る、唯一の手段かもしれない。だが、正しいからといって成功するとは限らない。それから、レレミアの志と好意について気付いていないわけじゃない。わけじゃない、が、……俺には応えることができない」

「……」

「この身体は、何も外見が変わらないだけじゃなくってな。少しずつ睡眠が浅くなり、食欲がなくなり、痛覚が鈍くなっていく。他、どんな感覚にあっても同様だ。だから、お前にどんな事情があるのかは知らないが、命をかけてまで力を求めるのはやめろ。ヴィエルラ樹海を越えてきたことに情けをかけてここに置いてやってるが、以前にも言った通り、もう力を追い求める時代は終わった。俺が終わらせてやったんだから、ありがたく日常を謳歌しろ」

「……ごめんなさい……私、わたし、……は……」
「っ、おいおい！　何も泣くことはねえだろ！」
シファは大粒の涙を流していた。どれほど手で拭おうと、それは溢れて止まらなかった。
「無神経、でした……私、……みたいな子ども、が……」
嗚咽の混じる声で途切れ途切れに話す。小さな疑問、少し聞きたかっただけのことが、余りにも残酷で、シファは後悔した。
その様子に気づいたレレミアとソルが戦いを中断して、シファとヒビナの前に降り立つ。
「なになに、どうしたのヒビナ兄！？」
「だいじょうぶ？」
ソルは首を傾げ、レレミアはシファの背中を擦りながらヒビナに詰め寄る。
「ちょっと昔話をしたらな……」
「あー……」
レレミアは納得したように声を漏らし、それから何も言わなかった。
沈黙が流れた後、ソルがヒビナの袖を引っ張る。
「ひびな、ごはん」
「……そうだな。そうするか」

★

シファは程なくして泣き止み、全員で食卓を囲む。ヒビナの横にレレミアが座り、向かいにシファとソルが座った。
「待て」
「？」
あんぐりと口を開けてパンを頬張ろうとしたソルが、そのままの状態で固まる。
「何でお前消えてないんだ」
「ひどい」
「そうじゃなくて、こんなに召喚が持続するはずないだろって言ってるんだ」
「……」
「答えろよ……」
ソルは不満そうにパンを置き、のんびりと話始める。
「ひびなからもらったしんきぜんぶそんざいかくていにまわした」
「……何だって？」
「むう」
まさに億劫、といった感じにソルは閉じていた目を開いた。黄金と深緑に輝く相貌がその場にいる三人を捉える。
「ヒビナから貰った神気を全部存在確定に回したの」
はっきりとした声が響く。あのソルがこんなにも普通に喋れるなんて！　と誰もが思ったが、できるなら最初からそうしたら良いのに、とも思った。
残念ながらそんな思いはソルには届かず、すぐに目を閉じてしまった。
「……どれくらい保つんだ、それ」
「たたかわなければ、ごじゅうねん」
「なっ――！　嘘でしょ、ヒビナ兄！？」
レレミアの言葉には二つの意味があった。一つは、最上位の神をそれだけの

間召喚できるだけの神気を持っているなど尋常ではないという意味。そしてもう一つは、ヒビナ兄にキスしやがったこの女（？）があと五十年もベタベタとくっつきやがるのか、というもの。
ヒビナはそのどちらもわかった上で、
「おそらく本当だろうな……」
「くっ……ぐぬぬ……」
レレミアは今にも向かい側に座るソルに襲いかかりそうだったが、食事の席ということで我慢していた。
「あの……」
「なんだ？」
まだ目の赤いシファが、おずおずと語りかける。レレミアは怒るのを一旦止め、シファの方を向く。ソルはマイペースに食べ続けていたが、耳はシファに傾けているようだった。
「私がどうしてヒビナさんの元まで来たのか、その話をしなければならないと思いました。……さっきのお話を聞いて、隠したままではいられない、と」
「……シファちゃん」
幼い頃のシファと会ったことのあるレレミアは、当然全ての事情を知っているために、心配そうにしている。
シファは一呼吸置いて、話し始めた。
「私はシルフ-ファム-ヴィンドヤルグ-ローレンハイト。神和ぎの領域である白域において、三大国家の内の一つ、ローレンハイト国の王女です。ですが、継承権は末席で、古くから財政を任されてきた国庫の番人、ヴィントヤルグ家の娘であるといった立場の方が強いです」
「……は」
「え？　えっと……隠していてすみませんでした……」
「何かあるとは思ってたが……まさか王族とは」
ヒビナは面倒なことをしてくれたと言わんばかりに椅子に腰掛け、深い溜め息を吐いた。
「ていうかイルの上司みたいなもんじゃねえか。なのにあいつ、シファの足跡を消してやがったのか……」
「やっぱりそうだったんですね。お父様のことですから、今日には家の者が来ていなければおかしいですから。イルさんなら、カリーも心配なさそうで本当にありがたいです……」
「で、お嬢さんはどうしてここにいらっしゃるんですかねえ？」
ヒビナのやたらと皮肉った口調に、シファは申し訳なさそうに肩をすくめる。
「……家出の機会は以前から窺っていたのです。そこへあの龍の騒動がありまして、その……」
尻すぼみな声に、見かねたレレミアが助け舟を出す。
「家、窮屈なのよね。あたしも八年前にヴィンドヤルグの屋敷にお邪魔したけど、あたしが小さい頃と同じで、戦争が終わっても変わらないのね、と感じた記憶があるわ」
「はい。お勉強は嫌いではありませんし、神通力の訓練も、していなければヴィエルラ樹海で息絶えていたでしょう。ですが、私は自由が欲しかった。世界を自分の足で歩きたかった。与えられることの最大限をこなしても、自分の意志では屋敷の外に出ることすらままならなかったのです」
「それが強くなりたいってのとどう結びつくんだ……？」

「家、ひいては国の誰よりも強くなれば、誰も私を止められませんから」
なぜか照れるシファに、ヒビナとレレミアは絶句し、ソルでさえも食べる手を止めてシファの顔をまじまじと見つめた。
「小さい頃、芯が強い子ねー……と思っていたけどまさかここまでとは思いもよらなかったわ……」
「まあ、確かに、その考え方からすると俺を頼るのは道理だな……」
「はい。そして、自由になった暁には、黒域すら旅して回るのです。経験を積んでローレンハイトに帰ってきて、より良い国にするのです！」
二人はまた、別の理由で絶句した。まだ十四そこそこの子どもが、こんなにも大きな夢を抱いている。力のこめられた細腕と、眩いばかりの碧い瞳に、ヒビナは目を細めた。
「……そういうことなら、良いだろう」
「で、では……！」
「本格的にビシバシやるから覚悟しろよ。丁度、レレミアとソルもいるしな」
「ええ。神和ぎでも魔法が使える方法、伝授しちゃうわ！」
レレミアも俄然やる気になり、ソルもキュウリを口に咥えたまま、ぶんぶんと頷いた。
「はい！　ありがとうございます！」
「じゃ、食べ終わったらジャージに着替えて家の前に集合だ」
ヒビナは空いた皿を持って席を立った。ソルもそれを真似て、立ち上がる。まだ食べ終わっていなかったシファが慌てて食べ始めるのを見て、レレミアは水を差し出した。
「焦らなくていいのよ。時間はたっぷりあるんだから」
「す、すみません。ありがとうございます」
神々を相手に戦っていた時とは、レレミアは別人のようだった。正しく言えば、ヒビナが関わると周りが見えなくなるのだろう。彼女だって、もちろんヒビナの事情を知っているはずだが、それでも諦めない、諦められないという彼女の思いに触れたようで、シファはまた、とても悲しくなった。
けれど、シファは自分が無力であることを知っていた。レレミアとヒビナに対して何かできることなどない。であるからこそ、今は肉体的にも精神的にも強くならなければならないと、そう決意した。
遅くなってしまった朝食を食べ終わり、席を立ったシファはレレミアと共に台所で食器を洗った。
その後、自室へ戻り、着替える。
身支度を済ませ、家のドアを開けて外へ出たシファを待っていたのは、三人の師匠と一本の枯れた木だった。
「……何ですか、これ」
こんなところには生えていなかった。それもそのはず、ドアから出たところの真正面にあるのだから、邪魔になって仕方がない。
「神通力を使える幅を増やすという目標は昨日とは変わらない。引き続き、創造もしくは破壊の域にある神の力を借りたいわけだが、丁度ここに創造の神がいるし、創造の魔法の使い手もいる。というわけで、まずは創造、それを象徴する木に関する神通力を学ぶ」
「以上の方針から、それはあたしが用意した枯れ木よ。特に何も変わったところもない、白域によく生えている広葉樹ね」
木の横に経つヒビナとレレミアが、幹をぽんぽん叩きながら言う。ソルは近

くに座ってぼーっとしていた。
「わざわざ枯れ木なので……花を咲かせれば良いんでしょうか」
「その通りだ」
「昔話みたいですね……」
「そう！　花咲かじいさんならぬ、『花咲かシファちゃん』よ！　――ちょ、ちょっと、そんな顔しなくても、ちゃんと効果あるんだから！　……たぶん」
「実際、形のあるものを使ってやるのは想像しやすいだろうという配慮だ」
「さすがヒビナ兄、良くわかってるじゃない」
「発案者はお前なんだからもっとがんばれよ……」
「さあ、がんばってシファちゃん！」
「ですが、昨日は神さまの声の断片すら……」
「そうだったの？　……うーん、とにかくやってみることが大切よ？　それに、昨日とは心持ちも違うはず。さっき話してくれたわよね、シファちゃんの夢、やりたいこと。神通力も魔法も、はじめの一歩は変わらないわ。自分が何を成したいか、どうなりたいか。それをぶつけるの。他でもない、自分自身へ」
　レレミアは、シファの頭を優しく撫でた。
「自分が何を成したいか……ですか」
　シファはゆっくり枯れ木に近付く。幹に手を触れ、目を閉じる。肌を撫ぜる風、鳥の鳴き声、森の匂いの中に、はっきりとしたイメージが湧き上がる。見えていなくても、自らの周りに満ち溢れる生命を感じ取ることができる。
　それらが全て、花を咲かせる――。
「χς;πψξπ」
　シファが自然に言葉を紡ぐと、枯れ木に美しい桃色の花が咲き乱れる。神気の流れは留まることを知らず、丘に生える草が全て花を咲かせ、森の木々にまで及んだ。
「うん、上出来！」
「？！　わ、私、ここまでするつもりじゃ……！」
　目を開けたシファは、花びらの舞う丘を見て驚愕した。いつもは神気を目一杯込めていたが、今はほんの僅かな力しか使っていない。それでも、考えられないくらいの影響を及ぼしている。
　ソルはとても気持ちよさそうに花畑に横になり、そのまま眠りについた。
「それが本当の力の使い方だ。その感覚、忘れるなよ。何でも力を込めれば良いってもんじゃないからな」
「は、はい」
「じゃ次だ。その木、邪魔だから家の横に移動させてくれ。別に切り倒したいんならそれでもいいが」
「さすがに切り倒すのはちょっと……。できるかわかりませんが、やってみますね」
　シファは真剣な面持ちで、再び木に向き合う。花を見上げて少し悩んだ後、
「χκγβδξρ」
　大樹の神の名を雑音混じりに呼んで、三歩下がる。
　木の根が次々と地面から顔を出し、自重を支えるようにして踏ん張る。木は数十本の根を器用に動かしながら歩いて行き、家の横の邪魔にならないところで勝手に植わり、動かなくなった。
「ど、どうでしょうか」
「シファちゃん、侮りがたし！　すぐにこんな無茶苦茶な応用ができるなん

て！」
「ヴィエルラ樹海を超えられる実力がまずおかしかったが、潜在能力は完全に未知数だな……」
「〜〜っ！　やりましたー！」
　シファは年相応に、飛び跳ねて喜んだ。レレミアが近づいて来て、再び頭を撫でる。シファは頬を赤くして、その顔を見上げる。
「よくやったわね、シファちゃん。あたしの弟子にもなってほしいくらいよ！　きっと、神和ぎ初めてのお医者さんになれるわ！」
　神和ぎたちには、病気や怪我を神通力で治す、という概念がそもそも抜け落ちている。治癒の神通力は創造の領域にあたり、魔法使いたちのもの、つまり異種たる力として認識されているからである。病状を分析し、薬を出す薬剤師はいても、神通力を使って治療する医者はいない。魔法使いに医者は多くいるが、十年前までの戦乱を引きずる神和ぎたちに、新しい一歩を踏み出すという流れは未だに無い。
　一通りの学問的な知識がシファの頭の中を駆けた後、ふと、自らが褒められたことに気がつく。心臓が激しく脈打ち、目頭が熱くなる。込み上げてきた感情を、抑えることはもうできなかった。
「どっ、どうしたのシファちゃん！？」
「い、いえ……違うんです、これは……嬉しくって、つい……」
「それにしたって……！　言いたいことがあれば言っても良いのよ。何を言ったって、ここにあなたを咎める人はいない。あたしたちだけしかいないから、大丈夫よ……？」
「……こんな風にしてもらえるのは初めてで、それで、っ、どうしようもなくって……」
　レレミアは何も言わず、シファを優しく抱きしめた。残酷な事実を知ってしまって、悲しくて泣いたのとは正反対の、暖かい涙がシファの頬を伝う。
　命を失う寸前まで傷つき、漸くここまで辿り着いて、漸く認めてもらえた。実の両親には叱られたことしかなかった彼女が、求めていることすら忘れてしまっていたこと。その小さな夢が叶い、これからの大きな力となる。
「レレミアも最初はそんなんだったなあ」
「なっ……！　くっ……な、何の話しかしら」
「覚えてないのか？」
　ヒビナが暗い笑みを浮かべる。
「覚えてる！　覚えてるわよ！　覚えてます！　だからその話はナシよ！」
「……くすっ」
「シファちゃんにまで笑われちゃったじゃない！　ヒビナ兄……後で再戦よ……ソルも絶対殺すから……！」
「ち、違います！　私はその、ここへ来て本当に良かったと……」
「ははっ、そりゃ良かった」
「……はぁ。そういうことなら、シファちゃんのその笑顔に免じて許してあげるわ、仕方ないわね」
　顔をあげたシファは、泣きながら笑っていた。
　柔らかな風が吹き、花びらが散る中、優しい時間が流れる——。

★

その夜。
「シファちゃん、寝ちゃったわね」
湯気の立つ紅茶の一つをヒビナの前に置き、レレミアは椅子に座った。
「使えるようになった神通力を丸一日反復練習してれば、そりゃ疲れるだろうよ」
「そうねー……あの木、最後には森の中を自由自在に駆け巡ってたものね」
「あれは傑作だったな。あそこまでいくと木じゃねえ」
「ええ。でも、あたしも神通力を練習していた頃はあんな感じだったわ。懐かしいわね……」
「ま、誰しも最初はあんなもんだ。俺だって死にかけた」
「へえ、それは意外ね」
「スイハは俺が動かなくなるまでやらせやがったからな……」
「……ヒビナ兄が自分からスイハさんの話をするなんて、明日は雨かしら、雪かしら。それとも世界が滅ぶのかしら」
「お前ら見てると、俺もいつまでも止まってるのが馬鹿らしくなってな」
「それは違うんじゃないかしら。あたしも職業柄、死に立ち会うことは多いけど、思い出は大切なものよ。思い返すことでしか感じられないのだから」
「そうか……そうだな」
ヒビナは紅茶を一口飲んだ。
「シファちゃんにはスイハさんの話、したの？」
「してない。してないのに泣き出しちまってな……」
「あたしだってスイハさんの話までは堪えたのに、やっぱり相当たまってたのかしら……」
「あいつのことだ、腹の中に溜め込んでたんだろ。ヴィエルラ樹海で死にかけたり、丸一日使って何も収穫がなかったり。その前にも色々」
「色々の部分大きいと思うわー……。あたしの家もかなり大きかったけど、たぶん王族はもっと特殊よね」
「だろうな。あの様子を見るに、よっぽどだろう。お前も大概だったが」
「あ、あたしはあそこまで泣いてないわよ！」
「どうだったかなー？」
「い、苛つくー！　シファちゃんが寝てなかったら……。あれ。そういえばソルはどこへ行ったのよ」
「まだ外の花畑で寝てるんじゃないか」
「自由すぎないかしら……」
「しょうがねえ、一応寝室に運ぶか」
「放っておいても何の問題もないとは思うけど、そのままは確かに何かアレね。スッキリしないわ」
「だろ？」
「じゃあ食器はあたしが片付けとくから、ヒビナ兄は行ってきて」
「おう。おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」
ヒビナはレレミアに促され、家の外へ出る。案の定、木の下で寝ていたソルを回収し、空いた部屋の布団へぶん投げる。
……ぶん投げる。
ぶん投げる。投げる。投げる。投げる。それはもう投げまくる。
どうがんばっても、ソルの手はヒビナから外れなかった。絶対に起きている

し確信犯だろうとヒビナは思ったが、見れば見るほどソルは完全に寝ていた。
腕をぶった斬ってから身体を離し、後からくっつけて元通りにする、という恐ろしい考えも脳裏をよぎったが、絶対に寝覚めが悪いので諦めた。ヒビナはソルに抱きつかれたまま、布団に横になり、眠りについた。
翌日、家の壁には再び大きな穴が空くこととなった。

★

二ヶ月後。
夏に差し掛かった、ある晴れた日。
森の木々は緑色の濃さを増し、空は高く、青い。今日も今日とて、丘にある家の横にある木の上で、ソルは気持ちよく眠る。
そんな穏やかな光景が広がるヴィエルラ樹海の中心で、爆音が響き渡る。音の出処では、女の子が二人、跳ねて喜んでいた。
「見違えるようね。合格よ！」
「はい！　ありがとうございます！」
切り拓かれた、丘に面した森の一部。そこに粉々になった岩の破片が散乱していた。レレミアとシファはその横で、ハイタッチを交わす。
「ああ。レレミアにすら負けず劣らない成長速度だ。これなら、次のステップに進んでも問題ないだろう」
後ろで腕を組んで見守っていたヒビナが頷いた。
「お次は特質の修行ね。……来ると言ってた専門家はまだなのかしら？」
「あいつはいつもこうだからな。忙しいから仕方ないが」
「久しぶりに会いたかったんだけど、残念ね」
「レレミアさんはお知り合いなんですか……？」
「知り合いも何も、……いえ、やめておくわ」
「ええっ！　私、気になります……」
「すぐわかるわ。じゃあね」
ローブをはためかせ、レレミアは森の方へ体を向ける。その様子を見て、目を潤ませたシファが深々と頭を下げる。
「……これだけの間、面倒を見てくださって……」
堪えてはいるが、シファはその後の言葉を続けることができなかった。
「顔を上げて」
シファがレレミアの言う通りにすると、頭にポンと手が置かれた。
「あたしね、一人っ子なんだけど小さい頃、ずっと妹が欲しかったの。それが叶ったみたいで嬉しかったわ。あたしの方こそ、ありがとう。また会う日まで、元気でね」
シファは表情を曇らせた。別れを惜しむのとはまた違う表情だ。
「妹、ですか……」
「あ……ごめんなさい、つい……」
「いえ、大丈夫です。素直に嬉しいですから」
「？　何だ、何かあったのか？」
「昔から思ってたけど、ヒビナ兄は無神経よね」
「まじかよ」
「事情を知らないので仕方ないことだと思いますが……実は、私には兄がいたのです」

「いた、か……」
「……はい。昔、レレミアさんに来てもらったのもその件です。兄様は幼い頃から身体が弱かったもので、その日は特に体調が悪く……」
そこまで聞いて、ヒビナは納得した。
治癒魔法というのは凄まじいものだ。臓器が全て吹き飛んでも、首が落ちても治すことができる。しかしそれは、素早く処置を行った場合のみ。何年も堆積し続けた病魔を治すことはできない。寿命という名の身体の限界を突破して生きながらえさせることは、レレミアやヒビナにすらできない。
「最後に湿っぽい話させてすまなかったな」
シファは首を横に振った。
「じゃあ本当に、そろそろ行くわね。時間も迫ってるし」
「はい……」
「泣かない泣かない！　今生の別れ、なんかじゃないんだから。そのうちまた会えるわ」
「……はい！　本当に、ありがとうございました！」
「よろしい。ヒビナ兄も、また時間ができたら寄るから、その時はよろしくね」
「ああ」
「さーてそれじゃあ、さすらいの医者に戻ろうかしらねー」
手を上に組んで身体を伸ばしながら、レレミアは森の中へ消えて行った。
後ろ姿を最後まで見ていたシファが、ポツリと零す。
「行ってしまいました……」
「シュゲルディア国から正式な要請があったらしい。あいつの性分を考えると当然行くだろう。むしろ、あいつがここまで長く滞在したのは初めてここへ来た時以来だ」
「そうだったんですか……？！」
「白域で病が蔓延しても、大型の魔物の襲来で大量の怪我人が出ても、現状はあいつ含めて三人の医者に頼るしかない。二ヶ月間も大丈夫なんてことは奇跡みてえなもんだ」
「でも、それって良いことですよね。頼りっきりはいけませんから……」
「もちろんだ。……遅刻魔は置いといて、先に特質の話を始めるか」
「わかりました！　私、がんばります！」
「やる気になってるのは良いことなんだが、特質はまた個人差が激しくて、俺ですら何とも教えづらい」
「そ、そうですよね……。人によって異なり、自身にだけ扱える固有の神通力もしくは魔法の形、とだけは教わりましたが、正直、何をすれば良いのかもわかりません」
「その通りだ。俺もわからん」
「ですから、専門家をお呼びしてるんですね」
「たぶんそいつもわからん」
「そ、そんな……」
シファはショックを受けた。最初の頃のような、ヒビナがヒントを出し惜しみしている様子でもない。彼は本当にどう教えていいかわからない顔をしていた。
「うーん……。イルさんとレレミアさんはどのように教えたんですか？」
「あいつらはなぜか最初から使えたからな。それについて聞いても『いつの間にかできてた』の一点張りだ」

「で、ではヒビナさんは……！」
最後の希望と言わんばかりに、シファは食らいついた。
「おっ、そういえば俺は修行して使えるようになったぞ」
「！　ならばまず、そこから実践してみましょう！　具体的には、どういう修行をしたんですか？」
「死ぬ寸前まで神通力を使い、身体から神気を絞り出し、それでもなお命を削って神通力を使い、それすらも出来なくなってどうしようもなくなった状態で、魔物だらけの雪山に放置された時、いつの間にか、な……」
「やめましょう」
青ざめた顔をしたシファは、首を振って即座に拒否した。遠い目をするヒビナに、これ以上何も聞かないことにする。
「専門家、という方が来てから改めて話し合いましょうか……」
「おう……」
ここへ来てお先真っ暗という悲しい現実を知り、思い出したくなかった過去を思い出し、二人はとぼとぼと歩いて家へ戻る。
丘の中腹へ差し掛かったところで、
「どいてえええ」
聞き覚えのある叫び声と共に、地面に映る影が次第に小さくなって行く。ひどい音と同時に二人の目の前に何かが落ち、盛大に土埃を巻き上げる。
少し経って視界が晴れると、地面に人が埋まっていた。
「だ、大丈夫ですか！？　って、あれ……？」
慌てて助けようとするシファが、何かを感じて手を止める。額をさすりながら身体を起こしたその人は――。

第七話　「強くなるために・三」　完

番外解説編-アートとココナの魔法研究室
第二回「魔法」

「やあやあ！　今回は魔法について学んでいくよ！」
「（随分と間が空いたような気がしますが、こちらは前回から一日しか経ってません）」
「己を知るには敵を知るべし、ということで前回は神通力について学んだけどやっぱり自分のことも知らないとね！」
「よろしくお願いします……」
「じゃあ早速、質問だ！　ココナちゃんは優秀だからね。魔法は神通力と似たようなものだけど、決定的な違いは何かな？」
「魔法は本人の力量に完全に依存し、何者にも力を借りることは出来ない点で異なっています。神通力よりも鍛錬が必要である代わりに周囲の環境に影響されず、神通力よりも可能なことの幅が広いです。例えば、神通力は自然現象からかけ離れすぎている力、瞬間移動や時間停止などを扱うことはできません」
「また僕が言うことなくなっちゃったね！　ハッハッハッハ！」
「それから、創造と破壊が大まかな分類であり、木、火とそれに関連する事象を操ることが得意です」
「コ、ココナちゃん……？」

「神通力は信仰に強く結びつき、魔法は学問に強く結びついているところも重要な違いです。特に魔法使いは、魔法を使わずに事象を操る『科学』という新たな分野でも研究を進めており、最近であればレレミア様が従来には存在しなかった、神気と魔力どちらの流れも遮断できる画期的な新結晶を開発されたり……はっ」
「……うん」
「も、申し訳ありません……」
「いいんだ。どうやら、僕より君の方が適任らしい……」
「それはどういうことでしょうか……」
「この腕章を、君に」
「……アート室長」
「ん、何だい？」
「神化と魔変について、私は詳しく存じ上げないのですが、ご教授願えませんか」
「ほほう！　ハッハッハッハ！　僕に任せておきたまえ！」
「（無言で頷き、ペンと紙を取り出す）」
「神化、というのは体内の魔力が全て神気に転換することだ！　すなわち、魔法使いが神和ぎになり、魔物が神獣になる！　その逆は魔変と呼ばれ、体内の神気が全て魔力に転換する！　ということは、ココナちゃん！」
「神和ぎが魔法使いになり、神獣が魔物となります（メモメモ）」
「その通りだ！」
「……半々の場合は、どうなるのですか（ペンを置く）」
「うん？」
「神和ぎの方が体内の神気を半分だけ魔力に変えると、どうなるのですか」
「……もちろん、死ぬね」
「絶対にですか」
「ああ、もちろん絶対にさ！　人間であっても、そうでなくても、そんな生物は有り得ない！　なぜなら、神気と魔力は同じ量になればなるほど、爆発的に反応性が増す！　陰と陽の関係であるそれらは、対消滅を起こして何もかも吹き飛ばすのさ！」
「（じっと見つめる）」
「……」
「（見つめ続ける）」
「……わかったわかった。本当に、君は賢い子だね。折角僕の研究室に来てくれたんだ、本当のことを話そうじゃないか！　ハッハッハッハ！」
「（頷く）」
「僕は、兼ねてより真実を探していた。そして辿りついたんだ」
「（真剣に聞き入る）」
「人の思いは、時に理論をも超えるとね！！」
「……え」
「君の質問に対する答えをあげよう！　もし、体内に半分神気、半分魔力を宿したら？　頑張って耐えるのさ！　思いがあれば、耐えられる！」
「（考え込む）」
「そうして混ざりあった神気と魔力は、力として行使される際に絶大な威力を誇る！　僕はその存在を、『魔神』と名付けた！」
「……！」

「ハッ ハッ ハッ ハ！　そう、僕は神と魔の狭間を研究している！」

「（目を輝かせる）」

「ようこそ、ココナちゃん！　アートの魔法研究室へ！！（両手をバッと広げる）」

「（次回へ続きます）」

了

○あとがき

書きました。

どうも、T.K です。

どうですかこの進み具合。こんなにも書いたのは久しぶりです。何日かに分けて書いていましたが、途中で覚醒して一時間に二千文字のペースになりました。

一時間に二千文字というペース自体は、過去に数回だけありました。最近であれば、「君のいない世界はこんなにも素晴らしい」の七話とかそのあたりでしょうか。

とまあ、珍しいことであり、今回はとても良かったということです。その代わり文とストーリーが駆け足になってしまった感は否めません。このペースに慣れれば安定して書けるとは思うのですが。

次、覚醒するのはいつになることやら……。そして、若干ネタバレ臭いアートの魔法研究室ですが、しばらくやっていなかったのは物語の進行度の関係です。仕方がないのです。

何事も、予定通りにはいかないものです……。

次回はやっと、修行パートが終わるかもしれません。途中すっごい戦ってましたけどね。

ではまた次回。